

(書評者)
総合母子保健センター愛育クリニック
小児精神保健科部長
小平雅基

『発達障害Q&A 臨床の疑問に答える104問』

金生由紀子＝編
今村 明、辻井農亜＝編集協力



2024年3月発行
6,600円(本体6,000円+税10%) 医学書院

本書は『精神医学』誌2023年5月号増大特集「いま、知っておきたい発達障害Q & A98」に、追加の質問を加えバージョンアップして書籍化したものである。日常診療で生じる多岐にわたる実臨床に沿った疑問に対して、発達障害の臨床の第一線で活躍する専門家たちが回答している。医療から福祉・教育領域の支援者まで幅広い読者の知りたいことにQ & A形式でわかりやすく解説しており、発達障害臨床の指針となる一冊といえるだろう。

今では「発達障害」という言葉は世間一般に広く知られるようになってきているが、その概念は時代とともに拡大してきた経過がある。歴史をさかのぼると1963年に米国で法律用語として誕生した「発達障害」という用語だが、さまざまな変遷を経て、日本でその社会的理解や支援が促進される転換期となったのは2005年「発達障害者支援法」の施行といえる。

ただし非営利団体が行ったある調査によれば、「発達障害」の社会的認知度は高い一方で、当事者や家族の多くは「十分に理解されていない」と感じているというギャップが存在することも報告されている。これは社会的な認知度が高まる一方、ともすればスティグマになりかねない危うさを示しているともいえよう。

同様に「グレーゾーン」「Highly Sensitive Child」などといった言葉も発達障害と絡んで臨床現場に広がってきているが、これらもまた整理が難しく、そのような用語を使用する背景には、さまざまな医師側の葛藤が見え隠れしているようにも思える。

2013年にDSM-5が登場して以降、自閉スペクトラム症をはじめ発達障害を特徴づける症状は、その程度が連続していると考えられるようになった。松本英夫医師が、主な発達障害の特徴について「スペクトラムである」こと、またそれゆえに「診断閾値下の特性を持つ児・者が数多く存在する」と述べている

当事者の「強み」をどう考え、どう引き出していくのか

が（本書 p.6）、グレーゾーンは本来、診断閾値下であっても支援の必要性が高い当事者に早期介入ができるように生まれてきた言葉である。しかし当事者を取り巻く生活環境によっては一利一害となるその扱い方は大変悩ましい。

本書は発達障害という医学的にも福祉的にも幅広い概念と疫学について多角的に丁寧に解説するところから始まる。われわれ支援者が何気なく使用する言葉が、当事者はもちろん社会全体におけるスティグマの解消の一端につながると考えれば、まずは概念や用語の定義の正確な知識を持ち、その理解を深めることが発達障害支援の土台となるのだろう。

一方で発達障害者支援法が施行されて 20 年近くが経ち「発達障害インフォームド」なかわかりが社会の中で広がりを見せてきたこともまた事実である。つまり発達障害の知識を持ち、その知識や情報に基づいた配慮のあるかわかりが医療、福祉、教育、産業領域で行われるようになった。

生涯にわたり症状が持続すると考えられている発達障害の理解と支援に当たっては、その名の通り発達の側面からの視点が欠かせない。家庭や学校などの環境要因との相互作用によって一人ひとりその特徴や抱える困難は異なり、それらについて検討されなければいけない。

その意味では日常診療においてもライフステージ別に幅広い視点が必要となってくる。本書は検査・診断・鑑別・併存、薬物治療について最新の知見が述べられていることはもちろん、早期に提供される療育的支援にはじまり支持的精神療法、認知行動療法、心理社会的治療まで、発達障害に配慮した上で当事者に支援が有効に提供されるコツが書かれている。そして当事者への支援のみならず、養育環境・学校や会社など

の社会環境に対する環境調整と支援方法についても実際の助言がなされている。

そして「発達障害とトラウマ」という児童精神科臨床上悩ましい判断が求められるテーマについても、複数の著者により言及されているところが大変興味深い。児童虐待などを含む逆境的な体験から引き起こされる（いわばトラウマによる過覚醒症状ともとらえられる）多動衝動性と、発達障害の中核症状ともいえる多動衝動性の鑑別は臨床的に大変難しい。

個人的には相談に至った子どもの発達認知特性とアタッチメントの不安定性、そしてトラウマからの影響をバランスよくとらえていくことが大切だと考えているが、その点について亀岡智美医師が、発達障害とトラウマ、そして心の防護壁となるアタッチメントについて詳しく述べている。診断の際に「トラウマの影響」を念頭に置くこと、そしてトラウマインフォームドケアを適時的に提供することの重要性について解説されており、見識を深めることができる。

最後に、本書編集者の金生由紀子医師が「まえがき」でも触れている通り、環境には「保護的であったり、発達促進的であったりするものもあり、それを活かす」ことは有用である。しかし、どうしても日常の診療においては当事者の症状、いわゆる「多数派である定型発達との違い」について目を向けがちになる。そして強みとひと言でいっても、限られた時間の診療の場でどう強みを見出していけばよいのか、途方にくれることも少なくない。

本書では、テーマは異なってもさまざまな専門家たちが「強み」をどう考え、どう引き出していくのか随所に織り交ぜて解説されているところが魅力的であった。本書を読むという行為はおそらく読者にとって発達障害の支援者としての姿勢について常に考えさせられる体験になるのではないだろうか。

精